

『落葉集』解説

1

『落葉集』にはすでに土井忠生博士による詳しい^{注1}解題があり、さらに近年、令息洋一氏によってその書誌学的補訂がなされ^{注2}、また内容についても、山田俊雄氏の^{注3}精細な論考が出ており、いまここに私が改めて補足しなければならないことは特にはない。ただ、『落葉集』索引の公刊にあたって二三、気付いた点を述べておくのも全く意味のないことではなかろうと考えた。また私は、キリシタン学を志すものとして、昨76年に欧州に赴き若干のキリシタン版を披閲する機会に恵まれた。もっとも、私の渡欧はキリシタン版の拝見が主目的でなかったこともあって、『落葉集』に限って言えば、ローマ本と大英本しか披閲していない。しかしながら大塚光信先生のご厚意によりパリ本とライデン本の、福島邦道先生のご厚意により大英本の写真を、それぞれ本書に収録し得たのは幸せなことである。

現在知られている『落葉集』の完本5本とその請求番号は次の通りである。

1. ローマのイエズス会本部文書館蔵本 Jap Sin I 201 (本書底本)
2. 大英図書館蔵本 Or 59 b 11 (漢字標出用符号は黒圈点、毛筆による書入れあり)
3. ライデン大学図書館蔵本 Jap cat 36 (小玉篇を欠き、本篇の第三丁は欠丁、第六丁は重複している)
4. パリ国立図書館蔵本 Japonais 344 (小玉篇を欠く。表裏表紙の裏打に『落葉集』の反故が使われている)
5. 英国クロフォード家蔵本 (小玉篇が本篇と色葉字集の間に挿入されている)

上記完本5本(私はクロフォード家本には接していないのでこれを除く4本について以下述べる)には「違字」なる正誤表が、本篇、色葉字集、小玉篇の各末尾に付されているが、4本についてそれは同一である。この正誤表が諸本でどのように訂正されているか、その実態を一覧表にしてみよう。表中、訂正されているものについてはゴチック体を以てそれを示した。

本書用 ページ数	原本丁数	正 誤	大 英 本	ライデン本	ローマ本	パ リ 本
本 篇						
11	4才6	蹄 → <small>てい</small>	いい	いい	いい	いい
15	6才4	電 → <small>らい</small>	電	電	電	電
	5	旗 → <small>はた</small>	なた	なた	なた	なた
16	6ウ1	棺 → <small>くわん</small>	棺	棺	棺	棺
	7	端 → <small>はし</small>	なし	なし	なし	なし
20	8ウ2	○輩 → <small>はい</small>	●輩	○輩	○輩	○輩
	6	坭 → <small>でい</small>	坭	坭	坭	坭
21	9才2	誦 → <small>よむ</small>	誦	誦	誦	誦
23	10才4	坭 → <small>でい</small>	坭	坭	坭	坭
24	10ウ8	丁 → <small>ちやう</small>	さやう	さやう	さやう	さやう
26	11ウ8	卿 → <small>がう</small>	卿	卿	卿	卿
28	12ウ8	緇 → <small>かつ</small>	緇	緇	緇	緇
32	14ウ3	鎖 → <small>さ</small>	かさ	かさ	かさ	かさ
	3	席 → <small>むろし</small>	むろし	むろし	むろし	むろし
36	16ウ8	問 → <small>かう</small>	問	問	問	問
38	17ウ5	卿 → <small>きやう</small>	卿	卿	卿	卿
	17ウ7	片 → <small>かたし</small>	かたし	かたし	かたし	かたし
39	18才4	雲 → <small>くも</small>	もく	もく	もく	もく
	7	府君 → <small>ふくん</small> 山府君	-府君	-府君	-府君	-府君
40	18ウ2	児 → <small>こ</small>	-児	-児	-児	-児
49	23才2	詠朗 → <small>ちやう</small> 朗詠	詠*-朗	詠*-朗	詠*-朗	詠*-朗
55	26才5	身 → <small>み</small>	身	身	身	身
	8	滅 → <small>めつ</small>	滅	滅	滅	滅
56	26ウ7	願 → <small>ぐわん</small>	願	願	願	願
57	27才7	卿 → <small>がう</small>	卿	卿	卿	卿
61	29才5	卿 → <small>きみ</small>	さと	さと	さと	さと
65	31才3	卿 → <small>きみ</small>	さと	さと	さと	さと
66	31ウ8	宣 → <small>せん</small>	をん	をん	をん	をん

本書用 ページ数	原本丁数	正 誤	大 英 本	ライデン本	ローマ本	パ リ 本
本 篇						
69	33オ 7	軽 → 経 <small>きやう</small>	軽	軽	軽	軽
75	36オ 5	違 → 違 <small>てい</small>	違	違	違	違
79	38オ 2	羅 → 羅 <small>すうもの すうもの</small>	すうもの	すうもの	すうもの	すうもの
87	42オ 1	然 → 然 <small>しかりり しかりり</small>	しかりり	しかりり	しかりり	しかりり
	8	倒 → 顛 <small>てん てん</small>	倒	倒	倒	倒
90	43ウ 2	耄 → 耄 <small>ぼう ぼう</small>	耄	耄	耄	耄
91	44オ 1	夫人 → 夫人 <small>ふじん ふじん</small>	夫人	夫人	夫人	夫人
	7	燭 → 燭 <small>しよく しよく</small>	しよく	しく	しよく	しく
96	46ウ 4	伺 → 祇 <small>うかがふ ついしむ</small>	伺	伺	伺	伺
	5	爰 → 茲 <small>し し</small>	爰	爰	爰	爰
98	47ウ 2	勞 → 勞 <small>うら うら</small>	うら	うら	うら	うら
	5	貞 → 負 <small>ぶ ぶ</small>	貞	貞	貞	貞
99	48オ 4	遮 → 遮 <small>さぎいる さぎいる</small>	さぎいる	さぎいる	さぎいる	さぎいる
102	48ウ 1 (49ウ 1)	壺 → 壺 <small>わぼ わぼ</small>	わぼ	わぼ	わぼ	わぼ
106	51ウ 6	書 → 尽 <small>じん じん</small>	書	書	書	書
110	53ウ 1	然 → 然 <small>ねん ねん</small>	ぜん	ぜん	ぜん	ぜん
	2	雜 → 離 <small>り り</small>	離	離	離	離
	2	画 → 患 <small>ゑん ゑん</small>	画	画	画	画
116	56ウ 5	答 → 答 <small>こたふ こたふ</small>	ことふ	ことふ	ことふ	ことふ
117	57オ 8	涼殿 → 涼殿 <small>りやうでん りやうでん</small>	涼殿	涼殿	涼殿	涼殿
120 色葉集	58ウ 7	接 → 撰 <small>せつ せつ</small>	接	接	接	接
132	2ウ 8	艱 → 難 <small>かたし かたし</small>	艱計	艱計	艱計	艱計
133	3オ 6	毒 → 毒 <small>にく にく</small>	毒く	毒く	毒く	毒く
	7	洞 → 洞 <small>ほち ほち</small>	ほち	ほち	ほち	ほち
137	5オ 8	ヒ → 。	-逐北	-逐北	-逐北	-逐北
140	6ウ 3	難 → 難 <small>なん なん</small>	かん	かん	かん	かん
141	7オ 2	加無者 → 加世者 <small>か せもの</small>	-加無者	-加無者	-加無者	-加無者
	8	吉 → 吉 <small>きつ きつ</small>	つき	つき	つき	つき

本書用 ページ数	原本丁数	正 誤	大英本	ライデン本	ローマ本	パリ本
色葉集 143	8オ8	薰物 → <small>きもの たきもの</small>	きもの	きもの	きもの	きもの
144	8ウ3	酒 → <small>すゝぐ そく</small>	すゝぐ	すゝぐ	すゝぐ	すゝぐ
146	9ウ4	造花 → <small>つりばな つくりばな</small>	つりばな	つりばな	つりばな	つりばな
147	10オ5	滑彼 → <small>なめしがい なめしがい</small> 滑皮	滑彼	滑彼	滑彼	滑彼
150	11ウ4	咽 → <small>あん いん</small>	ゑん	ゑん	ゑん	ゑん
	4	拭 → <small>しく しき</small>	しく	しく	しく	しく
	8	慕風 → <small>のあき のハき</small> 暴風	慕風	慕風	慕風	慕風
151	12オ5	苦 → <small>ねんろご ねんろご</small>	ねんろご	ねんろご	ねんろご	ねんろご
152	12ウ1	朽 → <small>けう きう</small>	けう	けう	けう	けう
	5	久父年 → <small>くねんぶ 久ねんぶ</small> 久年父	久父年	久父年	久父年	久父年
	9	闇 → <small>からす くらし</small>	からす	からす	からす	からす
153	13オ4	八入女 → <small>やをとめ やをとめ</small> 八乙女	(八)入女	(八)入女	(八)入女	(八)入女
155	14オ2	経 → <small>ね つね</small>	ね	ね	つね	つね
157	15オ4	兄守 → <small>このもり 木守</small>	(兄)守	(兄)守	(木)守	(木)守
158	15ウ6	怨 → <small>あお あた</small>	あお	あお	あお	あお
157	15オ2	紺 → <small>こうかき こうかき</small> 紺搔 海搔風腸	紺 海搔風腸	紺搔 海 風 腸	紺 海搔風腸	紺 海搔風腸
161	17オ6	逆 → <small>ちかしま さかしま</small>	ちかしま	ちかしま	ちかしま	ちかしま
163	18オ6	聞着 → <small>きこしめ きこしめす</small>	きこしめ	きこしめ	きこしめ	きこしめ
166	19ウ8	注 → <small>そく そく</small>	そゝぐ	そゝぐ	そゝぐ	そゝぐ
167	20オ8	後津輪 → <small>しつゝわ しつゝわ</small>	しつゝわ	しつゝわ	しつゝわ	しつゝわ
小玉篇 188	1ウ7	偷 → <small>ひそ ひそか</small>	ひそ		ひそ	
194	4ウ6	墜 → <small>だ つい</small>	だ		だ	
195	5オ7	汗 → <small>いん 汀</small>	汀		汀	
196	5ウ2	燃 → <small>ねん ねん</small>	ねつ		ねつ	
	5	煎 → <small>にん にん</small>	るに		るに	
	8	榴 → <small>じ じ</small>	榴		榴	
198	6ウ8	刹 → <small>せつ せつ</small>	刹		刹	

本書用 ページ数	原本丁数	正 誤	大英本	ライデン本	ローマ本	パリ本
小玉篇 202	8ウ3	杜 → 牡 <small>ぼ</small>	杜		杜	
	4	十四 → 四十	十四		四十	
212	7	良 → 佳	良		良	
	13ウ2	思 <small>じ</small> → 思 <small>じ</small>	思		思	
214	14ウ7	陶 <small>うた</small> → 陶 <small>たう</small>	うた		うた	
	7	とも → もと	とも		とも	
215	7	先 <small>はじ</small> → 先 <small>はじめ</small>	はじ		はじ	
	3	鼠 <small>さう</small> → 鼠 <small>そ</small>	さう		さう	
	15オ7 (15オ6)	戌 <small>じゅう</small> → 戌 <small>しゅう</small>	じゅう 戌		じゅう 戌	

すなわち、

- 4本にわたって訂正されているのは、本篇においては53ウ2の(会)者定離(離←維)、小玉篇5オ7の汀(汀←汗)は小玉篇を有する2本においてともに訂正されている。
 - 本篇43ウ2では、耆ぎ(耆←耄)が4本ともに訂正されている。但しローマ本のみ「をきな」の訓を落としている。
 - 本篇44オ7 燭しよく(燭←燭)は、ライデン本、パリ本ともに訂正を施さずもとのまま、大英本では「しよく」と訂正されておりローマ本も墨色は薄いが「しよく」と認められる。
 - 色葉字集14オ2の經けい(經←經)は大英本とライデン本ではもとの誤りのままをとどめ、パリ本とローマ本では訂正されている。同様に色葉字集15オ4の木守ももり(木守←兄守)は大英本とライデン本は誤りのままであり、ローマ本とパリ本は(木)守もりと訂正されている。
 - 本篇15オ2の紺搔こんこう(紺搔←紺、海鼠腸このへた←海搔鼠腸)の倒錯はライデン本においてのみ訂せられている。
 - 小玉篇8ウ4の四十(四十←十四)は、大英本は誤りのままでがローマ本では訂せられている。
- これらについては、もとより土井博士の言われるように「それら本文上の異同

はその本全体として総括すべきではなく各丁単位に個別的に考察す」(解題 p.45) べきである。しかしながら、たとえば本篇 43ウ2, 同 44オ7, 色葉字集 15オ2 のような例を、いかに解釈すれば現存諸本の関係がたがいに矛盾なく明らかにされるか、これはなお残された問題であろう。

2

次に諸本間の異同を写真の順に翻刻しておこう。土井博士の解題をあわせて参照されたい。異同の文字はゴチックで、ルビの異同は()を以て示した。

A 本篇 (以下、本書用ページ数。() 内に原本丁数を示す。土井洋一氏に従い、ローマ本(底本)をR本, 大英本をB本, パリ本をP本, ライデン本をL本と略称する)

1. R本 13-5 (5オ5)

B本 ●坊-主-号

L本 ○坊-主-号

R本 ○

P本 (-3 ○謗-難-言/-4 ○配-分-當-膳-流) 以上省略 ○坊-主-号

2. R本 22-5 (9ウ5) (事, 札, 書の位置に注意)

B本 -5○珍-宝-物-客-重/-6-肴-玉-膳-事-菓-翫-財-異-奇-衣

L本 -5○珍-宝-物-客-重/-6-肴-玉-膳-事-菓-翫-財-異-奇-衣

R本 -5○珍-宝-物-客-重-事/-6-肴-玉-膳-札-菓-翫-財-異-奇-衣-書

P本 -5○珍-宝-物-客-重-事/-6-肴-玉-膳-菓-翫-財-異-奇-衣-書-札

3. R本 22-7 (9ウ7)

B本 } ○鎮…守 -守府將軍 ○陳あふるし
ちん じゆ (ちんじゆ)ふのしやうぐん ちん

L本 } ○鎮…守 -守府將軍 ○陳あふるし
ちん じゆ (ちんじゆ)ふのしやうぐん ちん

R本 } ○鎮…守 -守府將軍 ○陳(あふるし)
ちん じゆ (ちんじゆ)ふのしやうぐん ちん

P本 } ○鎮…守 -守府將軍 ○陳(あふるし)
ちん じゆ (じゆ)ふのしやうぐん ちん

4. R本 52-8 (24ウ8)

B本 } ○空……
がう
 L本 } ○空…… -江書
え

R本 }

P本 } ○空……
がう (しよ)
 -江書
え (かく)

5. R本 74-1 (35ウ1)

- B本 ○五… ^{ぎやう}-行… ^{うん}-陰
(をこなふ) かげ
- L本 ○五… ^{ぎやう}-行… ^{うん}-温
(をこなふ) あたゝか
- R本 ○五… ^{ぎやう}-行… ^{うん}-温
(おこなふ) あたゝか
- P本 ○五… ^{ぎやう}-行… ^{うん}-陰
(をこなふ) かげ

6. R本 90-2 (43ウ2)

- B本 } -2●義… -色-定-式 ●^ぎ耆*^ば-婆 ●^ぎ議*^{はかる} / -3-定-分 ●^ぎ宜^{よろし} (むべ) -當
- L本 } ●^ぎ疑*-心-根-言-惑
- P本 } (但 L・P本は白丸)
- R本 ○義…-色-定 ○^ぎ耆*^は-婆^{うば} ○^ぎ儀*^{のり}-式^{しき} / -3 ○^ぎ議^{はかる}-定-分 ○^ぎ宜^{よろし} (べし) -當
- ^ぎ疑*-心-根-惑

7. R本 108-8 (52ウ8)

- B本 } ○十… ^に ^{けい}經
ふたつ たてすぢ
- L本 } ○十… ^に ^{けい}係
ふたつ つらなる
- P本 } ○十… ^に ^{けい}係
ふたつ つらなる

B 色葉字集

1. R本 139-7 (6オ7)

- B本 } ^{かげ}陰 ^{くもる} ^{くらし}
かくるゝ
- R本 } ^{いん}
- L本 } ^{かげ}陰 ^{くらし} ^{かばね}尸
くもるゝ かし
- P本 } ^{いん}

2. R本 143-8 (8オ8)

- B本 } ○ 濃絵 ○ 続松
- R本 } ○ 濃絵 ○ 続松
- L本 } ○ 濃絵続松
- P本 } ○ 濃絵続松

3. R本 155-2 (14オ2)

B本 }
 経（ね）
 L本 }
ふる
ぎやう

R本 }
 経（つね）
 P本 }
ふる
ぎやう

4. R本 157-3 (15オ3)

B本 }
 -3 ◦木舞-枯 … / -4…◦兄部-守
 L本 }

R本 }
 -3 ◦木舞-守-枯 … / -4 兄部…
 P本 }

5. R本 157-5 (15オ5)

B本 }
 R本 } ◦紺 ◦海搔鼠腸
 P本 }

L本 } ◦紺搔 ◦海鼠腸

6. R本 158-5 (15ウ5)

B本 }
 L本 } ◦價（かう）
あたひ
げ

R本 }
 P本 } ◦價（かふ）
あたひ
げ

7. R本 162-4 (17ウ4)

B本 } 五月男女
ま（う）とめ

L本 }
 R本 } 五月男女
ま（む）とめ
 P本 }

8. R本 144-1 (8ウ1)

B本・L本・P本の「れ」の見出し同一字体

R本 三本とは別字体

9. R本 146-8 (9ウ8)

B本・L本・P本の「な」の見出し同一字体

R本 三本とは別字体

C 百官并唐名之大概

1. R本 175, 177

B本 1丁と2丁の柱に「百官」の語なし

L本

R本 } 「百官」の語あり

P本

D 国尽之終

1. R本 182-10 (4ウ10)

B本・L本 「1598」の刊記あり

R本・P本なし cf. R本は小玉篇末尾に刊記あり

E 小玉篇 (以下 B本とR本との比較)

1. R本 201-8 (8オ8) 戻れいもともとも B本 なし

2. R本 202-4 (8ウ4) 四十 羊 B本 十四 羊

3. R本 192-8 (3ウ8) 驢よう「が」の字体B本と異なる。印刷後一字ずつの手
擦やがてしか。(土井博士解題 p. 44参照)同上 129-7 (色1オ7末) 岩い がん ・ 217-3 (玉16オ3末) 彩さい いろどる

4. R本 220-9 (17ウ9) 「1598」の刊記あり

F その他 R本 166-9 寥しづかなりはがらかの字下訓における汚れは他3本にはみられない
れう

3

原本と影印本をくらべてみると、原本における、刷り上りの墨の濃淡、和紙に漉込まれた夾雑物、紙の変色などにわざわざされて起る複製の限界をあらためて痛感する。また、従前の影印本(京大本)は実物を縮小しているため、濁点か半濁点か、また濁点も、単点か複点かの区別も必ずしも分明ではない。高羽五郎氏の注4労作もあるが、これも写真によられてのことであるため、それによる制約を受けておられるのはやむを得ない。この点について、大塚光信氏、土井洋一氏注5が滞欧中調査されたので、そのご厚意によってそれを整理し、ここに掲載させていただけることとなった。ただ、紙幅の都合でその一部のみを紹介し、全容は別稿に掲げたい。

土井洋一氏がすでに報じられたように、注6『落葉集』のルビ活字には、音符とま

ぎらわしい汚点をもつものが少なくない。最も多いのは「ふ」であり、たとえば被かうふる、11-4、渡すくふ19-7、潤うるほふ26-4、簡ふだ29-8、荷になふ32-1などの、単点かのようにみえるものや、また、船ふね11-2、札ふた25-2、宣のたまふ25-2などのように、半濁点のようにも見えるものがある。

そのほか、「し、つ、は、ゝ」などにもこの種の活字があらわれる。ただそれは土井氏もいわれるように、単なる汚点なのか、あるいは何らかの意図をもって清音に付された単点であるのかは未詳である。単点と複点の使いわけの有無については、単点のみしか認められない仮名もあることを土井氏は報じておられる。(前掲 p. 283)

以下にはとりあえず和紙に漉込まれたゴミ、印刷カスと認められ、符号ではなさそうなものをかかげておこう。いずれも写真では活字に付された符号かゴミかの区別の判定は困難である。

(本篇)

9-6 音 11-6 角つゝの、糞くそ 12-7 番つがふ 14-6 和やゝらぐ 16-7 意こゝろ 17-1 提心 18-5 掌しやう 24-4 歴れき 26-2 家いへ 30-7 殃31-1 番つがひ 32-2 霞か 34-3 看かん 58-8 母はゝ 67-7 腹 68-3 骨ほね、-8 者しや 73-8 音をと 78-5 札 91-3 香かうばしゝ 92-5 玄くろし 93-4 山ざん 96-8 理ことり 99-1 墜おとす 101-1 頭かしら 107-6 使し 108-2 中 111-8 底てい 112-2 役ほねやみ、者しや 113-7 座ゐどころ 115-3 志こゝろざし 116-5 像かたち 118-2 晴はるゝ -3 精くゝしゝ 心こゝろ 119-4 香かうばしゝ 120-2 壁かべ -3 笊しう 122-1 引ひく 123-1 心こゝろ -2 離はなるゝ -3 倒たほるゝ -5 礼うやまふ 124-2 囊ふくろ -3 心こゝろ -5 垂たるゝ -7 臥ふす 125-1 随したがふ

(色葉字集)

129-6 急すみやか 131-3 新納いまゝいり 135-7 誓つゝしむ 136-4 課いたす 140-7 杜若かきつばた 141-8 慶よし 142-5 宝ほう 148-4 旨 149-6 頒うたふ 150-2 一二三うたゝね 153-6 儲たくゝふ 154-1 益すくふ、希こいねがふ、前すゝむ -3 錯みたる 155-3 簡つね 156-3 塔こゝろざし -5 殺ころす 160-1 現うつゝ -10 数度あまたゝび 161-3 悟さとる -4 様つね 162-3 大角子さゝぎ -5 従議さも 171-4 掬すくふ、勝すぐるゝ -7 勸すゝむ 176-7 国子祭酒こくし

(小玉篇)

189-4 嫡たゞしゝ 190-1 聊いさゝか -7 否ふさぐ、古ふるし 200-1 香かうばしゝ -3 餓つかるゝ -4 製つくる 202-4 翔ふるまふ 208-7 放ほしいまゝ、敬つゝしむ 210-6 嶮けん 217-4 披ひらく

4

『落葉集』は浜田教氏のいわれるごとく^{注7}「本来、辞書であるからには、たとい現代的構成ではないにしても、或る原則に従って語と文字が排列されている以上、使い方によっては索引なしにでも検索は可能」であり「総索引は、却って煩わしく、実用的でない」とも言える。

しかしながら実際に『落葉集』を検索利用してみてもつねに痛感してきたところは、小玉篇に収められた字訓の多さへの対応であった。小玉篇にのみあらわれ、本篇および色葉字集にはもとめられない訓、というのも少なくないのである。試みに開いた一葉に、たとえば^こ勾^{まて}とある。この「まちて」という訓は、本篇^こ勾^ひ (p. 72)には得られず、色葉字集の^{ひく}勾^{かま} (p. 168)にも得られない。ほかに「まちて」なる読みをもつ文字も色葉字集には見当たらない。もっとも、「まちて」は手おかに見られる「節用集」諸本にも見当たらない訓ではあるが(『五本対照改編節用集』による)、しかしそのほかにも、たとえば小玉篇アナツル(軽)について言えば、色葉字集にアナツル(叢如)という一例があるのを別にすれば、本篇、色葉字集いずれもアナツルの形を載せていて、相互における異形の異同を詳かにすることは、索引なくしては困難である。また、アブラは、本篇、色葉字集で直ちに検索し得るが、アブラザス(脂)は小玉篇にしか求め得ない。この類の例は枚挙に遑がない。

『落葉集』はもと外人宣教師のために実用の書として編まれたものであるから、たとえば「アブラザス」のような語は脂字の特殊な訓として学ぶ必要はあっても、当時としてこれを直ちに検索し得る必要はなかったであろう。ただ、現代にあって、少なくとも近世語の研究に携わり、『落葉集』を利用するものの立場はまた別である。山田俊雄氏の「定訓」論も、検索の際の問題に発想されたようである。

『落葉集』は本来、日本人を対象として編まれた字書ではない。山田俊雄氏のいわれるごとく、『落葉集』が「節用集」類と「和玉篇」との、すなわち常

用漢字的と漢字学的領域とを極めて意図的に相補うべきものとして編まれた^{注8}というこの性格と、土井忠生博士の解題にくわしい、組織だった排列基準、および小玉篇にみられる世界観の反映は、いかにもヨーロッパの伝道を踏まえての綿密周到、合理的な研究の実践のあらわれと考えられる。このことは当然のことながら、『落葉集』の内容における強い個性的特徴と関連する。

編集者が外国人であるがゆえに日本語の姿を誤認しているのか、あるいは時代背景を反映したものかの区別は、もちろん分明ではないが、少なくともキリシタン物以外の資料では認めがたい記述が見られることは事実である。後述する分字された字体がその例である。『落葉集』自体に内部矛盾を含んでいるものもいくつか指摘し得る。たとえば、『落葉集』では「よみ(訓)」と「こゑ(音)」とをはっきり識別する方針を貫いており、漢字の旁訓は音または訓であり、漢字の下には訓を示す体裁をとっている。しかしそれらの訓を整理してみると、国語史からは必ずしも訓とはいいい難いものがあり、また同一訓が音と訓との双方にあらわれるものがある。安芸、阿波、下火が本篇と色葉字集にまたがって見え、硫磺が本篇に、礮が小玉篇の訓の部分に収められているのなどはその一例である。

＜山田俊雄氏の定訓論＞

ところで山田俊雄氏は、『落葉集』検索の指標であるところの旁訓——すなわち本篇における漢字の左旁訓、色葉字集における右旁訓、小玉篇における左旁訓——に注目し、旁訓相互間につよい相関関係のあることを発見されて、これらの訓に「定訓」という位置を与えることを提案しておられる。

氏は「定訓」について次のように言われる。

「某一字について、その呼称を考へる時に、直ちに喚起される字訓を、先づ第一にその字の定訓(またはその一つ)に擬することが許されるであろう。たとえば、「朱雀大路」の「じやく」をさすのに、現代人の場合、「すずめという字」と言えば、もはや必要にして十分である。すなわち「その字を指し示すに援用できて、十分その機能がみとめられるレベルに達してある語」を、その字の「定訓」といいうる、と氏は定義しておられる。

森岡健二先生がこの定訓論の意味を簡潔に位置づけておられるので、それを紹介させていただこう。「(『日ボ辞書』や「ことばの和らげ」が)ローマ字で書かれているのに漢字に還元することのできるのは、定訓のためである。つまり(チヨ

第三に、湯桶よみ、重箱よみの類が訓扱いされている。湯桶よみの例としては、^{いたえん}板縁・^{きりばん}切盤・^{こしち}越路・^{つればいけ}行平家その他があり、重箱よみの例としては、^{いぢあし}逸足・^{こうかき}紺掻・^{しじょうから}四十雀・^{づざり}切頭・^{ぶまる}夫丸・^{ほちまき}鉢巻その他がある。

第四に、連語の形であらわれるものがある。たとえば^{ていたいかつせん}手痛合戦・^{はやりおのぶし}早雄武士・^{てんしのゐどころ}辰・^{まんがまれ}万稀・^{つぶすきもを}漬胆など。

第五に、和語に字音をあてたものがある。たとえば^か加世者・^{せもの}左礼言・^{ざれこと}四迷地原や地名がそれである。地名(^{きい}紀伊・^{はりま}播磨・^{むさし}武蔵など)については敢えていちいち例示するには及ぶまい。(国尽しの条、参照)。

このほか色葉字集には、訓というよりはむしろ「あて字」というべきものがまじっている。

1. 漢字の「よみ」に対応させて宛てたもの ^{むつかし}六借・^{あなかしこ}穴賢・^{あらまし}荒猿などの類
2. 漢字の意味に対応させて宛てたもの ^{うなづく}點頭・^{こうろきたなし}腹黒・^{つれなし}厚顔・^{ぬめる}忽滑などの類
3. いわゆるあて字 ^{ひとりすまじうして}一々・^{うたよね}一二三・^{かろめる}上下・^{ともかうも}左右袖など
4. 漢字の音をあてたもの ^{きらびやか}寄羅美・^{よせご}富士籠及び上記第五項の類
5. 漢語を意識したもの ^{いざよらば}去来・^{にわか}造次・^{つくま}卓子など

などがあって、いずれも色葉字集の熟語訓に収められている。色葉字集所収の「訓」の性格を知る手がかりとなるであろう。

<字体について>

字体の錯誤について、山田俊雄氏^{注10}のお説を一部ここに紹介させていただくと、まず本来一字の漢字が二つに分字されている例がある。

月異名のヤヨヒ(穴柄) 153-3〔←竊〕, シモツキ(石幸月) 167-6〔←幸月〕のほか、

サシマハス(差車) 162-6〔←輦〕

モテナス(卿食應) 170-9〔←饗應〕

ムツマシク(合永巴) 148-6〔←合番〕

シギ(田鳥) 167-7〔←鳴〕などのほか、

スケ(曲侍) 172-3〔←典侍〕

シツラフ(断理) 167-9〔←料理〕

ユヨ(猶豫) 92-3〔←猶豫〕のごとき通俗の誤用をはじめ、

壮一状、微一徵、微一懲 などの混同例があり、そのほかに チカラオトス(眞) 136-8〔←チカラオコス〕・テラクタク(拱レ手) 158-3〔←タムダク〕などの不審訓を山田氏は紹介しておられる。ただ、「眞」、「拱手」に字訓としてはチ

カラオトス、テラクタクのよみは対応しなくても、ことばとしてはともに『日ボ辞書』に登録されていることを念のため付加しておこう。

字体の問題がなかなか厄介なのは、行草体では受容し得る字体のゆれが、楷書体となるといずれか一方に定めなければならないその不都合さである。例えば、「良」と「郎」とは『落葉集』でみる限り同一字体と認められる。しかるに本篇の該当箇所には

良らう 童どう 一 官 一 葉よし

とあって、行体ならば「良(郎)等」「良(良)葉」が共存しうるのに、楷体にするとは排他性を要求され、母字を如何様に認定するかという問題が生ずるのである。このように考えてみると、筆写体常用を前提とした『落葉集』にあっては、そのレベルにおける規範の問題は起り得なかったかもしれない。

<仮名づかいについて>

山田氏はまた同論文で、錯雑した仮名づかいの実態を報告しておられる。『落葉集』では多く同一語が二様、時にはそれ以上の書き方がなされており、氏の調査結果を手もとの資料とあわせ整理して示せば次のようになる。

1. 語頭の は一わ の混用例

はぎ一わざ(才) ハラハベ一わらハベ(童)
 ハラふ一わらふ(笑) ハラ一わる(破) など

この場合すべて「は」でなく「ハ」で表記されていることに注意。

2. 語頭の い一ゐ の混用例

いどころ一ゐどころ(座) いなか一ゐなか(為中)
 いぬる一ゐぬる(寝) います一ゐます(在) など

3. 語頭の え一ゑ の混用例

えびかづら一ゑびかづら(蒲)
 えふ一ゑふ(酔) えむ一ゑむ(笑)
 えらぶ一ゑらぶ(撰) える一ゑる(得) など

4. 語頭の お一を の混用例

おきな一をきな(翁) おくる一をくる(後)
 おこなふ一をこなふ(行) おとる一をとる(劣)
 およぐ一をよぐ(游) おのこ一をのこ(男)
 おほふ一をほふ(蓋) おんどり一をんどり(鳳)

おばしまーをばしま(欄) など

5. 語中語尾の はーわ の混用例

にハかーにわか(俄)

シハざーしわざ(業)

やハラかーやわらかなり(軟)

やハラぐーやわらぐ(和) など

6. 語中語尾の いーひーる の混用例

あいだーあひだ(間)

ぬいものーぬひもの(綉)

ほしいまゝーほしひまゝ(縦)

ついゑーつるへ(弊)

ついはむーつるはむ(啄)

さいはいーさいはひ(福)

いきほいーいきほひーいきをひ(勢) たましいーたましる(魂)

はいーはひ(灰)

わざはいーわざはひ(災) など

7. 語中語尾の うーふ の混用例

あらそうーあらそふ(論)

よぼうーよばふ(嗽)

こたうーこたふ(答)

かうむるーかふむる(かうふる)(被)

まうでーまふで(詣)

ゆうべーゆふべ(夕) など

8. 語中語尾の おーほーを の混用例

いきどほりーいきどをり(憤) うるほひーうるをひ(湿)

おおいなりーおほいなり(おほひなり)(大)

すなほーすなを(直)

たほやかーたをやか(嬋)

ほのほーほのを(炎) など

9. 語中の うーふーほ の混用例

おうすーをふすーおほす(命)

おうかみーおほかみ(をほかめ)(狼)

おうぢーおほぢ(祖)

おふづなーおほづな(をほづな)(綱) など

10. 語中語尾の えーへーゑ の混用例

うへーうゑ(上)

つえーつへ(杖)

とりへーとりゑ(肩)

はだえーはだへーはだゑ(膚)

ふえーふへーふゑ(笛)

てえればーてへれば(ていれば)(者) など

山田氏によれば、小玉篇は本篇や色葉字集にくらべると、内部的不統一は数少なく、整理が行届いている(前掲書 p. 36) とのことである。

<音韻にかかわるもの>

仮名表記にみる動揺の中に、それが音韻のレベルにおける事実として注目されるものも少なくない。気づいたものを二三、かかげてみると

○ 語頭の イーウ の通用例

イロコーウロコ(鱗) イヲーウヲ(魚) など

○ 語頭の イーユ の通用例

イルカセーユルカセ(緩) など

○ 語頭の ウーム の通用例として、

ウバームバ(祖) ウマルームマル(生) ウメクームメク(吟) がある。
(なお、『落葉集』ではこの類の語、すなわちムマ(馬)、ムマガヌ(褐)、ムマグシ(刷)、ムマノリ(騎)、ムマシ(美)などは、一般にム表記であらわれる)ほかにムバラーイバラ(棘)の形も見られる。

<文法にかかわる変異>

○ ハ行下二段活用とヤ行下二段活用

サカフーサカユ(栄) ヲシフーヲシユ(喻) コラフーコラユル(堪)
ソナフーソナユル(貢) アタフ(アタフル)ーアタユル(与)
タフ(タフル)ータユル(絶) カフルーカユル(換) クフルークユル(悔)
ソフルーソユル(副, 添)

○ b-m の通用例

アヨブーアヨム(歩) タノシヒータノシミ(楽) ケブリーケムリ(煙)
タハブレータハムレ(戯) トブラフートムラフ(問)
ハウフルーハウムル(ハフムル)(葬) マボルーマモル(守)
ネフルーネムル(眠)

このほか、開合にかかわるものとして、コタフーコトフ(コタウ)(答)および、ヲギナフーヲギノフ(補)の例を指摘できるが「コトフ」が正誤表で「コタフ」に訂正されているのに対し、ヲギナフの方にはその注記がない。ちなみに『五本対照改編節用集』によれば、天正十八年本と饅頭屋本にはそれぞれ「補」が、ヲキノウ、ヲギノウと現われ、この語についてはこの方が当時の規範であった。また、この類に属するツクノフ、ツクロフについていえば、『落葉集』および『五本対照改編節用集』ではいまだツクナフ、ツクラフの形はみられず、すべてツクノフ、ツクロフの形を保存している。

そのほか、uーoの通用例として、アナヅルーアナドル(軽, 慢)や、ナズラ

フーナゾラフ(准)の例があり、i-eの通用例として、ツバミーツバメ(燕)、オホ(ウ)カミーヲホカメ(狼)、カマヒーカマヘ(クガマヒークガマヘ(勺)、カドガマヒーカドガマヘ(門)、クニガマヒークニガマヘ(国)など)、スズカヒースズカヘ(角)、トノイ(宿直)ートノヘモノ(宿衣)が、また、ウ音便と促音便の並立例としてオフト・ヲフトーオツト・ヲツト(夫)、タフトシ・タウトシータツトシ(貴)がみられる。その他、なお個々の例にみる動揺としてサカサマーサカシマ(逆)、ツゴモリーツモゴリ(晦)、ヒガシーヒンガシ(東)、カホバセーカンバセ(顔)、カムリーカンムリ(冠)など両形のならばあらわれる例もある。

＜活用語における活用形の表出について＞

活用語における活用形の表示は、終止形なりあるいは連体形なりという単一形表示にとどまらず、時に連用形、また連語の形で示される場合もある。活用語を、便宜、動詞訓、形容詞訓、形容動詞訓に大別すると、主として動詞訓では終止形と連体形とが、形容詞訓ではシ語尾とシシ語尾とが、形容動詞訓では語幹表示と活用形表示とが、それぞれ共存する形であらわれる。実例をもってそれを次に示そう。

1. 動詞訓

(1)終止形と連体形の併存例

イユーイユル(愈) オサムーオサムル(収) カクルーカクルヽ(隠, 遁)
 カサヌーカサヌル(累) シヌーシヌル(死) ツミスーツミスル(罰)
 ハンベリーハンベル(侍) など

(2)一段活用の二段化との併存例

コヽロミルーコヽロムル(試, 験) ヒキイルーヒキユ(引率, 師)
 モチイルーモチフ(ユ)(用) など

(3)二段活用の一段化との併存例

フルーヘル(経) ウ(ウル)ーエル(得) など

(4)動詞例における自動・他動詞形の併存例

ハサマルーハサム(介, 間) フサガルーフサグ(塞)
 ヘダヽルーヘダツ(隔) ヨコタハルーヨコタフ(横)
 ヨバハルーヨバフ(ウ)(喚) など

(5)その他 文体にかかわるもの

シテース(為) ウヤマツテーウヤマフ(敬) ヲハンヌーヲハル(早)

サンヌーサル(去)　ヲメタリーヲムル(臆)　コビタリーコブル(媚)
フケタリーフクル(更)　ヤセタリーヤスル(瘦) など

2. 形容詞訓

(1) シ語尾とシシ語尾の併存例

イツクシーイツクシ、(美)　ウルハシーウルハシ、(麗)
カウバシーカウバシ、(香)　クハシークハシ、(精)
ケハシーケハシ、(蛆)　サカシーサカシ、(賢)
スサマジースサマジ、(冷)　メヅラシーメヅラシ、(珍) など

(2) シシ語尾とシイ語尾との併存例

イトシ、ーイトシイ(最愛)　ヤサシイ(花声) など

(3) 終止形と連用形との併存例

イカメシーイカメク(勢)　ウタテシーウタテシク(無下)
ハヤシーハヤク(迅)　ムツカシームツカシク(六借) など

3. 形容動詞訓

(1) 語幹とナリ形との併存例

アラターアラタナリ(新)　イヨヤカーイヨヤカナリ(森)
カスカーカスカナリ(幽)　カタメーカタメナリ(陳)
コマヤカーコマヤカナリ(濃, 密)
シヅカーシヅカナリ(閑)　スルドースルドナリ(利)
ミダリーミダリナリ(妄)　ユタカーユタカナリ(福)
タイ(ヒ)ラカータイ(ヒ)ラカナリ(平) など

(2) 終止形ナリと連用形ニとの併存例

カリナリーカリニ(仮)　コトナリーコトニー(コトナル)(異)
シキリナリーシキリニ(頻)　スグナリースグニ(直) など

(付) 副詞におけるニの有無について

アナガチーアナガチニ(強)　ワヅカーワヅカニ(僅)
サスガーサスガニ(雅, 繫)　タシカータシカニ(慥) など

(3) 形容詞と形容動詞とに跨る二形併存例

カタクナーカタクナナリーカタクナシ(頑)

<ナマ　ー　(ナマ也)　ー　ナマシ>(生)

<その他>

。色葉字集には、次のような擬声擬態語を思わせる類がみられる。(参考までに節用集の所出状況をかかしておく)

グリグリ (屈輪, 曲輪) 天・饅・易 サメザメ (少雨) なし

ツヤツヤ (一切) 饅 ビラリシヤラリ (東来西来) 饅

ユラリトノル (輕乘) 天 など

。『落葉集』にはまた、一字訓として提示されているもので実は熟語を思わせるものが若干ある。たとえば

アハツル (章) ← (周)章	イトシ、 (愛) ← (最)愛
ヒタスラ (向) ← (一)向	モダユ (絶) ← (悶)絶

などで、「和玉篇」にこれら^{注11}の字訓は見当らず、もちろん「節用集」類にも単字での「よみ」は見出し得ない^{注12}。これらはいずれも『落葉集』では本篇所収の左旁訓に施されているものである。

ちなみにこれら^{注11}の「よみ」は実は色葉字集にも類似の形で見られるのである

(本篇)	(色葉字集)
(周)章 アハツル	周章 アハテ
(最)愛 イトシ、	最愛 イトシイ
(悶)絶 モダユ	悶焦 モダエコガル、
(一)向 ヒタスラ	一向 ヒタスラ

以上

付言 『落葉集』の編纂における規範意識

——索引との連関において——

規範意識には、直観的なものと、反省的なものとの二つが想定されるかと思う。前者は、各人の言語行動を規制している環境の中で、自然に体得されたものであり、後者は、この体得されたものを反省にのぼせ、それに基いて批判的にうちたてられる価値判断である。

『落葉集』は今日の我々からみると、音訓の認定、仮名づかいの混乱、字体の異同などに亘って、少なくとも表面、不統一を呈する。この所与の現実を、他方また『落葉集』を貫いて窺われる規範意識との連関からとらえてみるならば、そもそも、そこにはたらいっているのは、どちらの規範意識か、いまこれは、にわかには明らかでないが、しかしヨーロッパ人のつねである、合理の科学精神を慮り、『落葉集』という、辞書としての、その役割からこの問いを検討してみるならば、ここに現われるところの、規範の「ゆれ」と一見おぼしいものも、規範の一貫性を欠いたその場その場の混乱なのか、さらには規範をふみはずして起こった誤謬であるのか、そうではなくてそれは編纂者たちの意図と不可分に係わりあうものであるのか、これがある程度までは明らかにされるのではないだろうか。

第一に、『日ポ辞書』と『落葉集』とは辞書として相互補完の語学書と解しうる。すなわち、『日ポ辞書』がことばそのものに関する辞書として対訳辞書であるに反し、『落葉集』は日本語に特有な漢字の機能を明らかにするために編まれた字書である。ちなみに山田俊雄氏は、土井博士が「落葉集解題」に述べられたところの「字形を取扱うのに部首排列の基準として意義分類を明確に表面に打出してきた」(p. 23) という点について疑をさしはさまれ、小玉篇は意義を扱うものではなく、むしろ検索法からみて、音を重んじた本篇・色葉字集に対して、形を重んじた追加編述ととるべきであろう(山田氏前掲書p. 171)と述べておられる。

もし『落葉集』がなかんづく形、音を扱ったという、この線で考えてみるな

らば、『落葉集』が編纂方針として、音訓を峻別し必ず兼備させることを貫いたのは当然の措置であろう。字体のゆれについては、解説でもふれた通り、当時の通行字体が行草体であってみれば、一部の字種については字体の通用を受容し得た、いな、通用を受容することの方が当時としては一般的であった、と解釈することで説明がつくのではなかろうか。なお、稿後に知ったことではあるが、山田忠雄氏に「認識論的文字論—誤記・誤植と通字とのあひだ—」（国文学叢第72・73合併号(昭51・12)）なる専論があることを付言させていただく。

仮名づかいについては、歌学の伝統を離れていえば、当時は「ゐ」—「い」、
「ゑ」—「え」、
「を」—「お」の区別に深く拘泥しないのが一般であるから、後世の意識でことごとしくこれを律することはできない。

「わ」—「は」の通用についても、ほぼ同じである。ただしこの通用についてはこれをもう少し実態に即して言えば、『落葉集』ではこの混用例における「は」は、すべて「ん」のかな（片仮名のハにあたる平がな）で書かれている。（例。オ
んぞ、童んらんべ、笑んらふなど）そして正誤表で「んた」を「はた」、「んし」を「はし」と訂しているのと合せ考えれば、この「ん」は、「禍わざない」、
「革つくりかん」のように、一般には語中語尾に用いられて「わ」に通用する文字として遇されているといえよう。したがって当然のことながら色葉字集の「は」部には、「ん」で始まる語は見当らない。もとより厳密に言えば、「わ」の形と「ん」の形とは、二個の別個の字形であって、音韻との対応のしかたを全く同じくはしないのであるが、両者の通用は当時の規範意識においては許されたのである。「ん」についてはすでに高羽五郎氏、安田章氏の御論がある。^{注12}
が、念のため一言するならば、「わ」に通用するの謂は、「わ」の位置に必ず「ん」が用いられるの謂ではない。それゆえ階「きだんし」16-1 とあるからといって「きだわし」と読むべきでもなければ、亭「あばらや」75-5 とあるからといって、それを「ば」とよむことが不都合であることにはならないであろう。「んた」「んし」を「はた」「はし」と訂正しながら「きだんし」「あばらや」の類に言及していないのはそれなりの意味があるものと思われる。

『落葉集』で注目されるのは音訓のその峻別である。すなわち、ここでは規範の支配が徹底している。少なくとも音訓の識別に関するかぎり、混乱の例、すなわち音訓の両方に重出するよみは意外に少ない。（本書解説 p. 12 参照）阿波、下火など——当然その根拠が考えうるところの重出——数例を除けば、すべて

の語が音訓のいずれか一方に整然と登録しわけられているのである。ただし、ここを支配している規範は、今日の国語学者の立場のそれ、いいかえれば歴史主義のそれとは本質を異にする。

さて、規範の価値判断がいわゆる共時論の立場に立つべきであるかぎり、『落葉集』の規範にはもとよりまた、そこに内在するそれ自体の論理があるはずである。これについては論を新たにして世に問いたい。

しかしながらここでは、索引の作製が、あえて現代通行の立場に妥協したものであることに、利用者の諒察を乞いたい。あえて以上の付言を添えるゆえんである。

注1 土井忠生博士「落葉集解題」(京都大学国文学会『慶長三年耶蘇会板落葉集』所収。昭37)

注2 土井洋一氏「落葉集解題」補訂(国語国文第46-4 昭52.4)

注3 山田俊雄氏「漢字の定訓についての試論—キリシタン版落葉集小玉篇を資料にして—」(成城国文学論集第4輯 昭46.9)

注4 高羽五郎氏『落葉集』(国語学資料第3輯 昭24)

注5 土井氏の調査結果は一部報告されている。注2参照

注6 土井洋一氏 注2参照 p.282

注7 浜田敦氏『慶長三年耶蘇会板落葉集』あとがき p.1

注8 前掲山田俊雄氏著 pp.14—23

注9 森岡健二氏「基礎漢字を考える」(「言語生活」307 昭52.4)

注10 前掲 山田俊雄氏著 pp.25—30

注11 佐藤茂氏編『古活字版和玉篇和訓索引』(訓点語と訓点資料第31輯 昭40)

注12 「和玉篇」におけるチェックは注11 佐藤茂氏の労作に、「節用集」におけるチェックは亀井孝、高羽五郎両氏編『五本対照改編節用集』によった。

注13 高羽五郎氏「ぎやどべかどる字集仮名字体」(『ぎやどべかどる字集(索引)』所収) 安田章氏「吉利支丹仮字遣」(国語国文第42-9 昭48.9)

ヲギナフについての補い

「補ふ」が、節用集の諸本のうち、天正十八年本、饅頭屋本、易林本のこの三本に見えるかぎり、それぞれヲキノウ、ヲギノウ、ヲギヌフのかたちであられる。このことは既述の通りであるが、キリシタン文献においてまずどうなっているか、これについて触れることを怠ったので一言補足したい。

『落葉集』では全11例中ヲギノフ10例、ヲギナフが1例みられる。つぎに『日ポ辞書』では *Voguinoi, nô, ôta*. すなわちヲギノウの形で現われる(いま、複合語の例は省略)。また、『サントスの御作業の内抜書』(加津佐版1591刊)の「和らげ」に見られる3例は、いずれもヲギノウである。ところが『ラホ日辞典』では全7例がヲギナウ(うち1例ヲギナワレザル)である。

開合の動揺が『落葉集』の段階で起っていないと断言することのできないことは、「答」の訓が正誤表(違字表)において訂正されていることを以て窺知しうる。11例中の唯一例だけしかヲギナフでないのをどう解釈すべきかについて、正誤をこの場合には忘れた、という可能性を否定できないかもしれない。ただここに注目すべきは、「をぎなふ」がたとえ“誤植”ではあっても、「の」がほかならぬ「な」で誤植されていることである。そしてさらに、ここに別個に、同時に注目すべきは『ラホ日辞典』にみるそのいちじるしい偏りである。

この語(すなわち「補ふ」)の場合には、音韻のレヴェルにおける開合の混乱とは別に、この語に個別の事件として、開合の動揺が起っていたものと解される。すなわち、歴史的にみて、また共時論的にも同じく、ヲギノフのかたちはヲギナフに比べて保守的であったと解される。換言すれば、音韻史のレヴェルでは、開合の発音の別がすでに混乱期に入っていたとして、しかし『落葉集』はやはり、開合の規範を厳守しているとみるべきである。ヲギナフの形がヲギノフの形と共存していることは、前者に訂正が、なぜ施されていないかという問題を、どう処理すべきであるにせよ、私どもとしてこれを、いわゆる開合の単なる混同例に、ただちに数うべきでないことを教える。